

第 26 回いたばし国際絵本翻訳大賞 イタリア語部門

『Uno come Antonio』 講評

今回の課題は、絵も親しみやすいですし、ストーリー展開も比較的わかりやすかったのですが、いざ訳そうとすると、とても手強い文章でした。ところどころに言葉遊びが見られるうえに、センテンスも長めなので、原文の意味を理解できても訳語選びに悩んだことと思います。応募作品からも、みなさんの苦勞の跡が伝わってきました。

アントニオという一人の男の子のなかに、それぞれのシチュエーションごとに、いくつものアイデンティティーが共存しているというのがこの本のテーマです。はじめのうちは語り手が登場しませんので、どのような語り口で訳せばいいのか迷いますが、20 ページでようやく語り手の存在が明らかになります。Quando viene a casa mia という文章の mia という所有形容詞で、アントニオ以外に、もうひとり友達がいる、これまでもその子がずっと語っていたのだとわかる仕掛けになっています。ですので、23 ページにある、alla fine lo trovo sempre の trovo は、主語がこの友達であることが重要なカギを握っていますから、io もきちんと訳出してあげなければなりません。そうすることで初めて、最後の il mio migliore amico という文章が生きてくるのです。

タイトルの Uno come Antonio は、un bambino come Antonio、つまり、「アントニオのような男の子」という意味です。タイトルは直訳でなくても構いませんので、話の内容を踏まえたうえで、全文を訳し終えてから、ふさわしいものを考えるようにしてください。「ぼくのとちアントニオ」「みんなアントニオ」「アントニオみたいな男の子」「あんなアントニオに、こんなアントニオ」「アントニオのこと」「アントニオってだあれ？」「なににだってなれるんだ」などなど、本当にたくさんアイデアがありました。とくに正解というものはないので、タイトルは採点の対象にはしていません。

気になったのは、解釈の難しい(何通りかに解釈できる)文章が多かったからか、訳文を読んだだけでは、なにが言いたいのかが伝わってこない文章がときおり見受けられたことです。読み手に解釈を丸投げするのではなく、自分でしっかりと原文を噛み砕き、消化したうえで、訳文を練り上げる必要があります。解釈があやふやなまま訳した文章は、迷いが読者に伝わってしまいますから気をつけてください。

それともうひとつ、単語の見間違いが目立ちました。intero(全体)と interno(内側)と intorno(まわり)、foglio(紙)と figlio(息子)、attore(俳優)と autore(作者)など、似た綴りの単語の組み合わせが複数あったせいもあるのだと思いますが、いったん思い込みで訳してしまうと、なかなか間違いに気づけないので、最初に訳すときに注意が必要です。

物語というものはすべてそうですが、前の内容を受けて話をふくらませていくのですから、ページごとに独立して訳すのではなく、前後のつながりを大切にしてください。たとえば、14 ページの lui preferisce farsi vedere da fuori という文章は、その前のページの、quell'Antonio segreto che è nascosto dentro の dentro という単語を受けたものです。ですので、たとえば「なか」と「そと」、あるいは「内側」と「外側」のように、対立する言葉で訳してあげるのが効果的です。

今回の課題は、絵本にしてはとてつ文学的な文章で、センテンスがとてつ長いところがありました。きわめつきは8ページの *Se si distrae troppo* で始まる文章で、関係代名詞の *che* を用いながら、なんと6行にもわたって1文が続いています。一般の小説でしたら、極力センテンスの長さを崩さずに訳すのが理想的ですが、絵本の場合には、読み手である子供たちに伝わらなければ意味がありません。ですので、2文か3文に分けていいと思います。たとえば、こんな訳がありました。「あんまり きがちると、アントニオは うちゅうをたびするひと になる。うえから みえるのは、じぶんのまち じぶのがっこう じぶんのきょうしつ、それにじぶん。じぶんって、せんせいから おこられている ちいさな ちきゅうじんのこと。このわくせいに いちばんさいしょにすんだ いきものについて、はなしを きいていないんだもの」。4つの文章に分けていますね。こうすることによって、ほぼ原文の順序どおりに訳せますので、ある意味、より原文に近いといえるのかもしれませんが。そもそもイタリア語から、まったく構造の異なる日本語に訳すのですから、すべての要素を忠実に訳出することは不可能だと言っていいでしょう。センテンスの長さや順序、あるいは言葉遊びやリズムなど、なにを生かしてなにをあきらめるのか、試行錯誤を繰り返しながら、出来上がった文章を何度も声に出して読み、もっともふさわしい匙かげんを見つけてください。

以下に、そのほか気をつけたい箇所をいくつかあげておきます。

・2ページ *si mette in mezzo per farli contenti* : 「(ママとパパの)あいだに入って、2人を喜ばせる」。*mettersi in mezzo* で、「あいだに割り込む」という意味ですが、ここでは否定的なニュアンスはなく、ママとパパが喜ぶように、真ん中に入ってあげる、といったニュアンスです。

・2ページ *quando è figlio può essere stanco, può fare i capricci* : この *potere* は、「～してもかまわない」ぐらいのニュアンスです。子どもでいるときには、多少のわがままをしても、許してもらえるといたことが言いたいのでしょう。

・6ページ *si becca una pallonata* = 「ボールをぶつけられる」。*beccarsi* は、*si becca un ceffone*(平手打ちを食らう)のように、あまり好ましくないものを受け取る時に用いられます。

・7ページ *finché la palla non sfonda la finestra dei vicini* : 「ボールが近所の家の窓を割ってしまうまで」。*non* は冗語ですので、否定の意味はありません。*sfondare* の訳を「突き破る」としている方が非常に多かったので辞書を確認したところ、最初の語釈が「突き破る」になっていました。辞書の言葉を引っ張ってくるのではなく、状況に最もふさわしい訳語を自分で探すようにしましょう。

・8ページ *Però basta voltare pagina* : 「ページをめくりさえすれば」。前のページで困った状況に陥っていたアントニオも、ページをめくれば、まったく違ったアントニオがいるよ、というニュアンスです。

・11ページ *Per fortuna a scuola non c'è solo la scuola* : 「ありがたいことに、学校には授業だけがあるわけじゃない」。2度目の *scuola* は、「学校」と直訳するよりも、「授業」などと意識してあげたほうが、意味が伝わりやすでしょう。

・13ページ *Antonio è un tipo tutto d'un pezzo* : *tutto d'un pezzo* は、「ひとつのかたまり」という意味と、「生真面目な性格」という意味の両方を持っています。ひとつのかたまりであるアントニオを、お医者さんが *se serve*(必要とあらば)、*lo smonta* (分解し)、よく診察する、とつながります。

・13ページ *Nello studio del dottore è un paziente.* : この *paziente* は、*un* がついていますので名詞。「患者さん」という意味で訳してください。もちろん、次の *perdere la pazienza* につながっているように、「我慢強い」という意味も暗に含まれています。

・14ページ *si tuffa con tutto se stesso nello sport* : 「全力でスポーツに没頭する」。*tuffarsi in...*で、「～に専念する」といった意味です。ここも、水泳の「飛び込み」と掛けています。

・14ページ *perché l'importante non è vincere, ma perdere subito la cuffia, così non ci si pensa più* : 「大切なのは、勝つことじゃなくて、水泳帽をすぐになくしちゃうこと。そうすれば、(水泳帽のことなんて)気にしないですむからね」という意味です。

・17ページ *un passeggero che non passa inosservato* : non *passa* inosservato と、二重否定になっていますから、「目立たずにはられない」という意味です。

・19ページ *per forza prendere un foglio* : この *per forza* は、「仕方なく」という意味ではなく、「～せずにはられない」というニュアンスです。お話が体のなかからあふれでてくるので、家に帰ったらすぐに、紙に書き留めずにはられないのでしょう。

・20ページ *potrebbe portare il temperino, ogni tanto* : この部分の条件法 *potrebbe portare* は、「持ってきてもいいんじゃないの？」ぐらいのニュアンスだと思います。アントニオくん、いつも鉛筆削りを忘れてしまって、お隣の子に借りているかもしれません。「たまには *じぶんで えんぴつ* つけずり もってきてよね」という訳でいいでしょう。

最後に、最優秀翻訳賞に選ばれた作品の、冒頭の部分をご紹介します。

「アントニオって すごいんだ。みためより ずっとね。／ たしかに、こうやって ひとりであるときには、／ただのおとこのこ なんだけど。」

左隣のページで所在なく座っているアントニオくんが、いったいどんな「すごさ」をもっているのだろうと、物語の最初から読者の興味をぐいっとひきつける力を持っています。それだけではありません。原文と照らし合わせてみてください。スペースにびったりおさまります。しかも字面がとてもきれいで、誰もがつかえることなく声に出して読めます。絵本の翻訳の肝がしっかり押さえられていますね。

翻訳をしていると、ついつい感情移入しすぎて、原文にない会話や、余計な説明を付け加えたいことがあるのですが、自分の創作意欲は極力抑えて、原文の熱量をそのまま読者に伝えることが大切です。

イタリア語部門 審査員 関口英子